觀音守護寶劍 六

へ13
3707
6

初夜を待てゝこゝに送りまゐらすと涙を流して拝りたれば寿之も
ものいと押量り共に愁を催しゝ時に春之答へて云く我
先にも思へるごとく因り神明のく罪なき人を害まこと謂れ
なきに似たるべゝ察する所果して鰐鮫鯛鰤の業なるべくんば速ま
ちの変化を退治せんいかゞやうんにはまちの勢子をだに貸しのべ
今霄河瀬の鱒を添へくゝらる行き山神の正体を見顯はゝ
若魔魅の類なゝば生捕て後の患を除くべし主の心如何ゝ
云へば否ゝさるゝにに得たりとて御罰をる蒙りたれば先のとしも
武者修行に出て人の他の家に泊りたる其折も人身御供を
備へぐる時節なゝ今霄悲がのなる如く変化のものも退治せんと
勢子を倶ゝ彼の山を上れる山神大に荒れ震動稲妻

門へ13
號3707
巻6
大正十年八月廿九日
本大學出版部

天地に満ちたる雷鳴の烈しき中に情ある人も修行者は引裂くが如く
失ぐらめおく怨ろしく例もなかれば必懼れ慎しむべき度にて唯
思ひ〜とりあくとあるごとに舌をつさ〜に放心色とも見えざり
ければ春之助ものがたりしやうを大丈夫の魂なれば零ぞうり事とも
ゝもの正体を見顯はさんと思ひたれば主にむかひくりかさねて
只山神と生捕ることは為まじきなれど今宵帰りし因よりて阿娘に
ゝこと送ぐ〜喰はせを詰しまへと覆ふ蛙なれば主も怪く喰ま
ればかくて初夜の程近くなれば内外の人々声をそろへて歎きに
歎くるに主もいと〜いたはしくくれるこの一間ま急ぎ入りぬ其あれ
潮くんのさまく偏ま客の躰を断に成られば春之助も脚絆の紐を堅
直に帯ぐ〜と引結び見送る支度ぞとその所に思ひ〜向の

うちなる下部の若者十人ばかりどやく〜と走り出るを縄を用意て
春之助をまんまるにおつとりこめ動くまじとて呼ばりければ春之助の如何なる
支とも分らぬが故を問んとするに主の声と覚くて汝盗賊
むらー讃州新珠島に徘徊して住還を却らせ兄徒よみいるあれば
今此所に来りしとこそ汝が運の究めなれ疾くいなしめば受く
べしとて小きまきはりつ一刀を撫て出れば春之助もなほ
不審晴れず主にむかひて云るやう斯く我に無実の名を負しめふか
正しく子細ぞあるべきいかなる支ぞ誼とて云ひあふと向へば
主はかぶりを怒りを為して実を猛くしき盗人なる今汝が傍を懐中ろ
耶ぞ〜明巻と見よとて我が好支まて織〜めるる木綿なりな
真ちーる小切と縫つけ筆ぶくろ置る幡山氏の三字ぞ

春之常姫萍
水相遇斬道
見報君親
之仇

赤松春之

鬼塚道見

常姫

中にハ〻〻に貳拾余の數の小刀を入き置ぬ或夕暮の度ゝ行ゝ
二三人の奴僕を引俱し彼の所門を通行ゝに賊首と覺しき大男が
ゝくの松の木蔭より駆出無二無三に奴僕等を切倒し我が衣服
及び其刀剛卷まくうばひとりかの木蔭にゝくらひしがられい固ゝ
劒術の一手ゝに知らざれば是に双句ふかもなく唯辛ゝて逃げ
ゝへり如今也彼が言葉をゆきくに山神をぶる恐きざる不敵と云ひ
ゝと彼の胴卷を所持ゝ正ゝ〻〻完徒に疑ひなしいざ縄掛れと
堰ゝれバ春之丞ハ〻と左右をとゞめ主と仰ぐ平伏〻〻謂て云く
物ハ我が恩人にて有りよ唯思に申〻演き一條ほろゝも我が
幼ゝ〻〻時故ゝて賊の爲に人買人の手にゝりむる〻〻く
月日と過ゝ〻ど國より大望を思ひ立ゝる身に〻あれば何卒其

本懷を達ゝんと讃州丈度寺の觀世音に祈誓をうけくゝどに
歩〻を運ぶ所ある時新珠島の邊に松の根もとに休ふ〻〻
ゝくの松の洞の中に人の屈める有樣なれば當時此往還に人を
惱ませ盗賊なめりと手をゝ延て掴ゝ出せば人にハあ〻三重程の
衣服ゝ下ゝ〻ハ二十又余の金の入りゝる彼の胴卷を引出〻ぬこや
正に賊の奪ゝる財宝と覺れば最忌〻〻き物に思へど我に此金
ゝ〻ぶ人買人に與と償ひ身に轉じ〻〻いゝ大望を思ひ立べき者ぞと
思惟〻〻ゝ我邪なる心ゝ求る金にあらざれば必ず本懷を達し
後ゝく奪ゝる主をもゝる恩を謝〻〻〻逐ゝ〻〻唯其時の證にと
常に肌身ゝ〻〻〻〻〻〻〻此胴卷を所持ゝ〻なり唯恐〻〻〻〻我未
本懷を達ゝざれば金を酬ひ奉るべき手段ゝ〻さハ〻君とハ何の

知れるうへいらにせうく一度恩を報ぜべく願ひくれもぐくがほぎとすらめへと理をめく焼かれば其身舌の爽るに主も忽ち解けるとて汝が言葉の端く幡れる処なんがとのづく賊なるとは呼らくるまんば金も一度賊の手に奪ひ取る度みんがさく汝が拾ひ得て身の代に為やこともを是と我る償ふべき潤んるく我過て汝と賊徒と思へばこそ縛めくも紀明やんとうるく雑兵引くと下知すれば清寄せる下部のやうく八やがく左右へ別れるくり春之の左と内くへ天を仰ぎ地に卧くつ恩を謝すに言葉なく只位に泣くるくるや彼の郎供を送り出べき時刻なると主を急がすれば上下の人々慌乱し斷にあくにあき出くぬ春之の秋て主に別れを告げ斷の跡辺に添て歩に多く程近き傍らの老若男女集り来りて是を見る其悲く

切くく袖をぬらるくり物山中を三里ばかり行くる夏の山神の祠に所まぐの外他の人の行く道を禁じるく三さ背乱くに別れ行くが春之ひとりちんるるく唯見え隠るつき添べくと南に恩紫を廻らくつ徐くくに隨ひ行くるが程なく祠のまくる至まぐるくに輿と居並き来れるおのこどもの跡をも見ざく迎げるくぬ頃くも長月の半ばの空晴さくるくて乃もさく最物冷き山林の気色るに春之の傍の木蔭に身を潜めの只山神の正体を見あくはく祈くの彼のものを退治るくひとくる恩人の嬢と助けるくものと一心にやと居れるが不思議や俄に暴風起り今まぐ晴る中天の一面にうき曇りく彼の主の物語に遠ひるく震動稲妻天地に満大雨盆と傾ぐ如くくれば春之の大に懼れ暫時十方に暮るくらし

魔神の我を裂べき所存なるべし我も又魔神と裂かん手段あるいかなる妖怪にくも出来しと例の如くに拳をかめ奮然として立ち所に進よるれるの山陰より一燈の團火中有に燈き忽初前に飛来りの尼堅らる團の上よりとぶまりうり兎角〳〵白髪なる老翁の面〳〵鬼のごとくなるが嚇ゝ長劍を帯手に鉄杖をつりてげ〳〵爽〳〵然と出来るれが次第に團火の数も多く〳〵踊にハあまたの眷属を引連られ老翁のうへにいと大なる雨傘をさしかけ物老翁が團の扇を押ひ〳〵ふ裡に坐しる麗人の身に尽く白衣を着眼を閉て合掌しめ年ハ二八計と覚しく其顔色の艶なること実に譬ものに物なるが老翁頻に歓びて やがて又團の扇を押ひ〳〵者共なるべし荷へと下知すれば是に ひらへ〳〵春之ゞ〳〵と近づき團の長柄に両手をかけ大

磐石と動かるゝが老翁と始し〳〵眷属も皆驚天し汝如何なる者なるぞ〳〵人間の通いめ方に来りしぞ疾く〳〵うんと割りて其時春之助ものどもの様態を窺ひ見るに是紛もなき山賊なるまゝ始め〳〵安堵の思いと為し〳〵尽く退治し〳〵此女婦を救ひべしと忽あるに心を配り無二無三に腰なるひとめく手も見ぬ當る所の小賊等ハ五三人切り倒せば老翁怒て あん曲者を切て捨ん 前後左右に下知をつゝく身ハ大木を小楯にとり悠然とひく居るに〳〵兇賊等ハ手〳〵に力と拔き〳〵春之を目がけて〳〵家も大浪の岩にぶつかりて砕るが如く火花をちら〳〵戦へば あらに飛る團火と〳〵〳〵も皆殘りなく消〳〵〳〵真の闇夜となりぬ 物ハ團火ハ硝子なれ表を張り裡に燈を点じるを多く小賊らに

もゝ〳〵の名ぐ戦の急なりくれば皆をめづ〳〵とう落し さらにこえ雨の降ることつゝ〳〵 頻りに風烈うし〳〵 古木を鳴〳〵せば空よも鮮皮そそ物凄〳〵くぞ少えなる 斯て物のあやめも分るゞ春之ハ唯闇と霧獲〳〵 夜刃のごとくに立居うり又賊徒等ハ内外人とうゝへとゝ各武具を潮へつゝ一度まどづと喚てうんぐさんぐの赤松春之も進退ものゝ〳〵 度と失ひ已に窘く見えゝる所に忽四方八面うり勢子の大勢宛も訊雷の落来るごとく彼の賊徒等と切りうゝ〳〵きすもあゝや攻うゝ〳〵 頃史に一人も残りるゝ 麓にぞ為〳〵うり名これを聞と帰て春之ハ常姫もうともぞ道見に討てうんぐ実に道見が天罪と蒙りめぐき時ろうん彼のめきもうる飛龍丸の宝劍を打落ふ十方に暮て立うる所に日頃の本望此時ぞと常姫ハつゝ 駆寄り懐劍を逆手に持て道見が咽板ろけく突通ハ手のうゝ眼眩ろ胸板ろけく突通ハ春之見るうほうゝ歓ひ怪我ぞ一ほる事云らつも持る太刀とろ直〳〵猶道見が馬手のほゞに突きぬさんぐ道見眼を怒〳〵あぶ無念口惜〳〵やと髪逆立て呼りゝ我一度足利家を亡さんと謀り故密に味方をとり集めかゝることぞの軍用金を貯へ〳〵も由ち〳〵度とるゝ名〳〵逃もゝく運命の究るゝ〳〵汝等ども残多く冥途の鬼と為さべきぞいで〳〵道見が宜後の手並克く見ると引手に馬手に手をさしのべ二人が拳とひとと掴んぐ突ぎうる刃とうろくぷと左右へ引拔ぐが無ハ渾とほとぐ〳〵て大地も朱る際成〳〵ゝ二人ハさうぐ切る太刀にさ〳〵ま道見うゝ名ぐを品ぐ倒れるゝ〳〵ちち〳〵と春之が走り寄つゝ刃と列れが常姫ハ又傷に落うる飛龍丸の宝劍をとり上つゝ麓と

撫づく押いらぐき鞘の中に収めるくれば不思議や虚空に翔廻斗る
飛竜の姿し消るが如く俄に雨晴雲収りくもるの月夜と成りぬ
くること国より宝剣をめきくるーて自在の風雨を呼るべし斯る
くらへ常姫の父と宮ぇー家主が甲斐ぐーく身を堅め十人計の
美女を伴ひ歓び勇んで名乗れるが遥か下づく平伏ーし先万歳と
唱へにる常姫の夫と見て父上何ぞ此所にはあやしーぞ〻〻〻
不思議の命を助り剣へ是る赤松春之の蔭をもくむーしの父の
仇さくく報じぬと夏の始末ハ分るども先歓びを告ぬり久めば又家主が
打うあづき仰まぐも〻〻〻今宵ハ我も見え隠れに見る興に付添ひ
来りへはれる木陰に潜く居く夏の由ぬがのうるく承りさるーぬと
やがて春之に對ーいふくるも我ハ幡山五次名衛と申さあに

さるーふが先歳より赤松家の御領地にく村長の役目を蒙り
家名もあづく連綿と絶ざるーしが常祐公の御代に當るく鬼塚
道見る逸にり不慮に御家滅亡の刻り右く當国乃山家り
隠きく時節の至るとまらぬ然る不思議の変ぬーい其頃
砌の猟に大きる熊鷹の一人の小児を掴み来りく斬く羽と
休ひと見えるく彼の鳥や過ちくくの小児を木のもとにそと
蔭ーめ下にいさんいあまるの菜と積置れば射も恵るくまらび
居ると走り寄りく耳上げ見れば幼けれども容顔殊に美ーく手の
るへ足の纖やるるも如何様由ある人の子と見えるれば先家に
懐き入れく妻にもらくと物ぐるに妻も又いくくーしことぐるる
いまだ子とるのらぬざんがやーるひるくく子にぞさんにくいく

赤松春之

孝子功成
天賜景福
常姫
幡山夫婦

冨を加へ給へ斯て氏子の懐を見れば錦の袋ともるゆへ氏子
いぶかしく思き見るに種々の御守を入置り其中に正しく赤玄
常祐公の姫君と知りめぐり水茎の跡さく見れば物い主君の姫君
にぞ有けると殆奇異の思ひと為し且驚き且悲んで先御在所と
問んとあれば東西をぞる分ちあはぬ幼君なれば如何にともせんうと
なく只もりうに奉るにいかくべくべと歎き悔りて我が子と号し日に
月に帥づき光陰早きるにいに今姫君の御年の十七歳にぞ度セ
ぬる氏姫君の赤松家にて誕生あり〳〵その〳〵永享十一年乃春
あるきよて年とび知りえりめされば御父常祐君が道見が絶ふゆ亡始末
迫並て御史に達セーがいうにもしく其仇を報やくと志バ御心は
安ドあいぞるの〳〵愚ひ悲〳〵あひつ然るに氏にと思ひ〳〵ぞも

生贄の沙汰ありくるる賊の呼為とい為にて知らぞ唯山神の詫宣
ある心得れ然身代りばかて備へんも御罰のほどの恐らく神支といかに
為るべきと偏に心を痛めーるどう〳〵神明の冥感ぞ〳〵支の〳〵
あるいに部る御命と乞奉ん若又納受あるざる時ハ譬へ蛇にも
魅よて〳〵彼の神体を討果しえこうい姫とさて如ものとらまち
御罰をかへる見ぞ命にへ〳〵覚悟は究め勢子と集めく謀計と
廻らき呼に君〳〵ぞも今宵ぞ家に憩ひあるくくの物語に
彼の山神を退治ん〳〵とのあひしぞ我思ふ小比神必生贄とる時に
外人の至る時ハ忽雨を呼び風を起し〳〵屡人と害ナれば容易に
行て災を引出さんも計るべ〳〵唯止るに如ドと思ひ〳〵我が愚
るる〳〵る英雄豪傑を知らぞ〳〵再三止め奉り〳〵ど君

鶴ヶ山神を退治すべきやうちあれがためぞ加勢を願ふる地にくいよ〳〵勢子の手分を定め遠巻に山をとりまき木陰くに是を伏やう〳〵今や遅しとまち所に白髪なる老翁のつゝめ〳〵出来たるが面正〳〵新珠島に我を剥ぎ盗賊に縛なんぞ心中に是と怪しんぶ〳〵孫子を伺ふ所に君忽見あひて姫君の御物迫再姫君の眸手に入ると安きまうへの御歓やさぶ〳〵ぐき時にうしろの山同うほまと女の泣喚きて只なんくとも助けを乞こゆわれが疾く行て子細を問かに是尽く生贄ゆ備へんなる美女ら〳〵皆我が知れる於ぐの娘なりき則茲に引具しさるひめを一同に首と下れば勢子の面〳〵歓び勇〳〵万歳楽とぞ祝ぐ

物春ゝハ比あぐらをきく〳〵に始て愁眉をひらきつゝ〻ゆるべきをるゝ〻ば時らくうつゝぬ其先に家路をさ〳〵いそぐ爲し五次名衛いざく案内と先道見が頭と掴んで常姫もりとも立上れば五次名衛ゐも小躍しほまゝの美人を是に随へ勢子の人数に下知をつゝくて前後左右を守護せめ凱歌をうゝめ〳〵に乃も其後京都の将軍家に詣へ出れば時に足利義政公の御代に當りて大に四海に徳政と施しめ一国平均の打柄なるになんらう目出さき例ハいよ〳〵安全長久の基ぞとく頓に春之常姫の両人を京都に召れ尽く御感の餘則赤松常祐の本領とのうゝ返し与へゐに乃ゝと春之い鶴姫と妻女に爲るべき上意と蒙り千ヒの黄金を頂戴し〳〵首尾ゝ御前をまゝん出ぬゝ

春之赤松家を再興し給ふ謹て常祐の霊を祭り父母の碑を
建て度寺に立て彼の院主に八幾度の施物を送りぬ播山五次名幣
に千ケ所の田地を寄へ給ふ題に尽く鎮國を守ぶ羽又
道見に奪ふ所の美女を先達て家に返せば
親族の歓べること大なるぞ後こそ美女達の皆常姫に仕へく
ぐるされば春之常姫は身を安うして紳衾の上に坐し紳帳の
中にむかしを忘れる比いとせの天響寄遇千代に八千代に量り
あぐ日出度うるる例しぞ今の世を耳傳富

巻之三大尾

軍書小説類藏板目録

大坂心齋橋通南久寶寺町　伊丹屋善兵衛

源平盛衰記　片假名　廿五冊
後太平記　片假名　廿五冊
殘太平記　同　十二冊
駿臺雑話　平がな　五冊
室鳩巣翁の著也るて仁義の大意を敷て鬼神の説和漢古今名將勇士の去行を評し法制の要略兵法和哥詩文の諸説老儒の見あり
四國軍記　一名土佐軍記　同　十二冊
續武將感狀記　同　十冊
聖德太子傳圖會　平かな　六冊
楠正行戰功圖會　平がな　十一冊
畫本西遊全傳　四十冊
太田道灌雄飛録　六冊
左衛門大夫太田持資入道を添三位卿政綱の後胤と称し上杉氏の家臣文武の英才を兼ね恥ざる一世の戦功忠義を委くしるす
繪本玉藻譚　五冊
同　白狐傳　一名玉藻物語　十冊

復讐山石見英雄録　全部　五十冊

此書三編まで作者各智より四編以下廿九冊の一家の手筆にて紀氏を山石見氏と通編話説の主人公にて絵本の五傑と称する勇士の伝にて由良様の賊徒新潟天橋立の復讐を主題作者の新案を費せり七編に結局その総計の一案あり八冊を以て一部とす

繪本金花談	十二冊	世俗のいろいろを伝える忠義の安奈と葛葉かるたばなしにて絵紙なり
同　雪鏡談	十二冊	

刀筆青砥傳　八冊

此書は水戸藩の藤原子の原稿を曲亭翁の筆削せし物にて鎌倉の政治の公正なる事を賞して愛妾を捨て数一の奸夫偽三郎を賜りて盗賊べと誣告して殺さんとせし青砥藤綱が明断各その罪を照て懲せる説話奴案なり

同　二嶋美雄記	十冊	
同　彦山霊験記	十冊	
同　亀山話	十冊	

蜜水室の八雲　八冊

下野国の国城主某の家臣平四郎国範が忠心遠隔の新平左郎が妖術妖婦夕霧が毒牙を蹈み平左衛門が患孝を感動くものなり

同　合邦辻	十冊	
同　浅艸霊験記	十冊	

鎌倉年代圖會　五冊

教経郷縁会の創業より宗尊親王の下向まで終て将軍家五代の間の時事を委くあるも

同　金毘羅神霊記	十冊	
同　誠忠傳	十冊	

鎌倉大樹家譜　五冊

宗尊親王鎌倉に着府より累世執権鎌倉の西心の家雄北條の一門亡びて後醍醐帝天下を平定するまでを編

同　孝感傳	十冊	
同　顕勇録	十冊	

武蔵坊弁慶異傳　十冊

歴世中が水滸伝の面目を摸て変化を敷向みれば甚奥ある小説なり

同　奇縁傳	十冊	
同　忠孝美善録	十冊	

大内多々羅軍記　六冊

大内義隆の弱者風流より嬖臣相良武任佞智浪人服部を罪ふ隔れ玉妻を君に進

同　伊賀越孝勇傳	七冊	
三弔復讐　檀之二葉	六冊	

むるの妖婦生駒の方がくり陶屋張る時賢夏が大悪逆なれど正史に載入せる面白き稗史なり

近江縣物語　五冊

花山院の御代なりし頃上條丸が全傳すべく盗賊為の保輔斎明寺が残暴を稿安世が女園生が奥操安世が鬼常人が邪慾臨病の為梅丸の兄光弘君を謁して城後征伐の大将軍為の保昌を助けて賊を平らげ後に近江掾に進み生の父母に逢ひ住居してその父の妙なるを聞いて知るべし

昔語松虫墳　六冊

建武の頃摂津国阿波の国の勇士野田太郎清秀武安武勇妹桂子なる継母桃が奸淫安井隼太が陰悪妻田勝美義里なる聖田の家を木津源八が妻松女が狂死木津源太郎が非情の遊女栢木が孝心松虫墳経塚なるとの由来をあらす

北野霊験　二葉の梅　六冊

就善の義賊池上七九郎が悪悪の孝子蜀女と上田茂之二郎が復讐の小説にて悪が年岩見之亟義候の老人を教諭がなるを綴りたるものなり

報恩琢話　十かえの花　六冊

建久年中なり出羽の山縣の郷士常盤井内記泰兼則が二男瀬二郎夫人が仙郷に誘れて教を受け後年諸者を助けて父の仇を山伏山を討ちて仙女去来見と昇天せる奇談奇事なるべし

奥州の白石辰の臣藤崎三郎右衛門なる者千田民部を撃ちて松田伊織を斬り松田夫婦と民部が孫民弥が義民弥が死魂民部が庶子民五郎とを童に憑て復讐させしを探せり

人丸廿二枚絵卵紙　六冊

天文の頃播磨国三木の城主別所長治の臣籠崎兵左衛門が女子なる遠原勇蔵が孫松三郎左衛門が奸悪を高村の俳優が義勇を絵にして紙に詠る詩を載せり

矢口續話　新田神霊　忠孝貞婦傳　六冊

大庭伊織信綱八幡田阪右衛門が謀計に中りて自害し妻の里尼と家臣巻田蜀助が貞烈忠勇なる寛を尊び孝婦なり

復讐言千丈松　七冊

近江の土松井逸崎源人篠村大義を歌後れ茅屋両人孝子寛家を窺ひ青柳佐市友くもの阿波の篠村にて志を遂げ小信

忠孝人龍傳　五冊

弥生佐久羅　六冊

播磨の良民恩地左近が女児弥生なる佐久羅が佐久羅庫が狂死を子源二郎が胆力の奴を除く又池田の里なる福富が女児田鶴が踊松平軍を騙術秋山大膳が縁を八尾宮龍丸が滅亡源八郎の子孫なり

花標因縁車　五冊

小鹿半左衛門が心金と彦兵衛が遺恨を恋の頻悩の常念法師が為手の縁の因縁と怪くなる

玉搔頭　五冊

三光の獅のるを主とする落語にて上野の国高井土の呉服屋十兵衛が義太郎の義を兄弟の如く仲睦まし方を知て百方に捜索の金を盗賊の婦の路留村山銀の強盗を捕へ

乳瀑の士人東條図書幼年にして父助を失ひ仇山中壮二郎を年久しく尋ひ撫り遂に和州郡山まで復讐せし事実を録し
て後世の傳奇に紙を吳る

南部小西本忠孝記　五冊

敵討

奥州南部の士竹内新吾同藩の新参の士小栗弟止と結み縁ある人をして討殺させ本小栗が僕喜助縁ある他郷をさすらい阿波国に新き生の妻子ふ告知せて小栗百二郎を悉く父の仇を討せし事実なり

長崎聞見録　五冊

理斎随筆　六冊

和漢の新事何れも新奇なれば世の評論無用なり

輪廻物語　五冊

信仲和尚古語八房の流唐より安名高僧の時明屋海外の奇と悲く伶俐の作る説とを統合して浮屠説陽両方の統を附会して小説荒唐にして架空の語備り和漢の史外に忠孝奇節を表す

風流茶人氣質　五冊

金屋金五郎全傳　五冊

泊花堀江の市人金五郎が風流の新奇事蹟の不思議なる情実の儲を平時開発の事柄可なり大きく隆盛に至る雖人者の一小説なり

東西両本願寺来由

繪本石山軍記

初編十冊出版
二編十冊嗣刻

土屋正義編述　松川半山画

此書は本願寺源縁より茅八代蓮如上人自ら聖法を子の宗祖と崇
め拝ませの莊内石山寺堂を剏しめより茅十一代顕如上人の世ふ
到り織田信長此地の要害と出て本願寺を退け城郭を築らんと願
ぬ上人と十余年の戦争ふ絶本願寺の衆徒と幸本願寺の衆徒
織田の大軍に対し攻戦等ふ怪し絶本孫市の勇
戦国豊人危難九死の名号の志の陽根ふ窮薬無戦対孤城
の英智を幸と徳川家の義定川ふ入れ
勅命を信く顕如上人石山を開城し紀州雑賀に住居ふ
之を改る時ふ逆徒明智光秀本能寺ふ於く信長を弑を知ふ

森の寄るを賜ひに於て未孫い吸ぐ踏躍を書き中國の名ぐ此
大意と耳元刺と糸墜し猛勢ぐ山陽の一義お光義を立て書名
上人聖を森と出て白狐物見塚お稱り又て陽お遷住武八京都洗川お
陸奥と造営おして住ぬお能名上人八叙の後つお長準お教ぬ上人
東西お名て書を遂然楽をるの時赤首の山中より出れ伐ぬ石
陸山の後士接力徳玉の門法号石を「遣び孫お南奉記寺執筆を
偏お他力本願の意佛赤書お知り益に業へ宗生涯後の有ぐ記を
遂て絵人の読ぬ赤ぐ石山合戦お揭る美談を滅ぐ著を

出版人

大阪府下南久寶寺町四丁目

前川善兵衛

繡像復讐石見英雄孫

全部五十冊

南海 玉藻主人 編輯

浪花 鶯宿斎歌川芳梅 画

○初編 赤師人作 ○二編 玉藻主人調書 ○三編 [illegible]子綱著 ○第四輯以下作者一家

永禄天正の頃流浪名嶋の豪士岩見重太郎橘種李が生ちより武者修行

ヒー 山の武功大蛇の害を除き老狸の妖を殺せー勇威を振め張る天の擂台あれハ

廣瀬成淵八川ホ三人の大敵を撃て父兄の怨恨を晴ー絶ホ室町殿ハ奉仕て任官

ー絵ホ毛水正ヨ嶽撃れるを問る高堂峯豪ハ長邪淫婦岩瀑孝女新月ホ[illegible]

絵ー 黒の五雄と称する勇士の列伝霊猿悪魚の怪談ホ五輯よりハ益入佳境新話多り

浪花書肆

前久寶寺町心齋橋北エ入

前川善兵衛藏